論　文　審　査　の　要　旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	ウィリアムズ厚子
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

定時制高校生の英語における数字と語と文の直後筆記再生の分析と教育的示唆

論文審査担当者

主　　査	教　授	山田　　純
審査委員	教　授	安仁屋　宗正
審査委員	教　授	吉田　　光演
審査委員	准教授	町田　　章

〔論文審査の要旨〕

本研究は、定時制高校生の英語に関する認知機能を、英語音声呈示による数字、語、文の直後筆記再生課題において大学群との比較対照分析を通して明らかにし、英語教育へ応用することを目的としている。

第１章では、わが国の定時制高校と本研究の対象校の実態について記述した。

第２章では、聴解のメカニズムにおける中心的概念である記憶とワーキングメモリに関する先行研究を概観し、さらに本研究に関連する、ワーキングメモリと教科の習得との関係における先行研究について触れ、本研究の位置づけを行った。

第３章では、本調査で実施する３種類の記憶再生課題として、英語の数字、語、文の各課題の調査法と評価法について述べた。英数字と英単語は、前者が最高頻度語であるという違い、英単語と英文では、後者は統語意味知識が関与するという違いがある。

第４章では、英数字課題の結果、高校群の再生率は大学群よりも著しく低く、日本語による頻度効果の影響を受けていたが、大学群はその影響を受けていないことが明らかになった。また、数字は、小さい方が大きい方よりも長期記憶にアクセスしやすいこと、置換エラーについては、両群ともに数字頻度効果の影響を受けていること、脱落エラーの分析では、両群ともに数字頻度効果の弱い傾向があることが明らかになった。

第５章の英単語課題では、高校群の再生率は英数字再生とほぼ同程度で、大学群との差は、語の親密度と知識に起因することが推定された。また、両群の再生パターンが質的に類似しており、連続的であることをうかがわせた。したがって、系列位置効果に加え、語特性に関する長期記憶の影響を受けていることになる。

第６章の英文課題では、両群の再生率の差はさらに拡大し、文再生には、音韻的長期記憶や統語意味知識の効果が大きく、学習経験が強く影響をしていることが示唆された。高校群の再生においても大学群と共通する長期記憶の影響があるケースがあること、大学群の再生にも、日本語の影響を受けたと考えられるケースがあることも明らかになった。

第７章では、３種類の課題の共通数、５語、６語、７語の再生結果を比較し、異なる言語課題における認知機能の群差と群内差を分析した。再生語数により群間、群内で記憶再生の処理が異なっていること、再生語数が多くなると、群間での処理の違いが小さくなること、さらに、再生課題の語数にかかわらず再生数自体は、それぞれの群においてほぼ一定であることがわかった。

第８章では、本調査の結果をまとめ、そこから得られた教育的示唆として、高頻度とみなされている語句であっても、さらなる過剰学習が必要であることなど、今後の英語教育への応用について述べた。

本研究では、さまざまな結果が報告されているが、以下の３点が評価される。

1. 高校群は、大学群に比して、３課題で成績が劣るが、より英語知識にかかわる文課題において差が拡大している。しかし、他の２つの課題成績から判断すると、高校群に学習障害があるとは認められず、学習経験不足が主要因である。
2. 大学群もワーキングメモリの許容量を超えると、高校群の再生処理に類似し、系列位置効果や語親密度や音韻知覚困難なども現れやすくなる。
3. 高校群の３課題の再生において、英文再生と英語の成績とは .69 という高い相関がある。これは統語意味知識の英文再生がおよぼす効果を強く示す。また、高校群の再生成績のばらつきが大きい理由は初学者特有の不安定な反応に起因する可能性がある。

以上、審議の結果、本論文の著者は、博士（学術）の学位を授与される十分な資格があると認められる。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。